

「底が突き抜けた」時代の歩き方 456

超大国アメリカにふさわしい大統領選であったか - 米大統領選

《ブッシュの選挙キャンペーン現場に行ってみると、国旗掲揚があり、牧師さんが話し、胸に手を当て国歌を歌う。支持者はまるでサッカーや野球の応援のように、絶妙なタイミングで声援があがり、シュプレヒコールが起きる。

演説はシンプルで、「正義、信念、良心」とスパッと言いきり、一気に「Four more years!（あと4年） Four more years!」とスパッと盛り上がる。みんなで車に乗り合わせて来歩いて、細かく戸別訪問しているのがわかるし、受け付けでもこまめに声をかけるし、動員にも熱が入っている。

一方、ケリーの方は「保険問題について…「ウワアアア」「イラク国民のためにお金を…」「ウワアアア」という感じで言い切る前に盛り上がってしまい、観衆に助けられて演説していた。リーダーとしての力強さも感じにくいし、この人に投票しようという気持ちにもなりづらい。ボランティアもネットで募集していて、動員もネットとか電話なのでなんか連帯感がない。日本のよさこい祭りみたいだけど、細かく見ると地上戦ではブッシュが有利だった。》

アメリカ大統領選の激戦地といわれるフロリダに行った大川興業前総裁の大川豊が、こう記している（11.22付神戸）。ブッシュ陣営のこの「フォー・モア・イヤーズ」（もう4年取ろうぜ）という合唱については、作家の米谷ふみ子が、この《トーンは何かナチスの青年組織であるヒトラーユウゲント（ここには年寄りも多くいたが）を思い出させ憂鬱になった》と、『論座』（04.11）に書いているが、同じ誌上にTBSワシントン支局長の金平茂紀が、「選挙戦そのものが最大のテレビショーだ」と題するリポートを掲載している。「テレビが大統領選挙の勝敗を決する」という古臭い言い草を通り越して、もはや《選挙自体がテレビの「内部のこと」として進行している》実情を目の当たりにして、《選挙はテレビショーのように進められ、それをテレビがテレビショーそのものとして報じる。有権者は視聴者・観客として自ら振る舞い、テレビという空間のなかですべてが決まる。米大統領選のこのあまりの露骨さにはただただ辟易するばかりだ》という感想を漏らし、8月にニューヨークで開催された共和党大会の取材を進めていく。

《記者リポートのため、カメラマンとともに、厳重な警備の敷かれている会場フロアに降りていき、大会の進行を見守っているうちに、とても奇妙な「既視感」に襲われた。

「おい、これって僕らがテレビ局のスタジオで日々やっているバラエティーショーそのものじゃないか」

そう、大会の進行自体が、放送台本に従って進められる、まさに生番組なのだ。有権者＝視聴者を飽きさせないように、そこにはさまざまな工夫が凝らされている。歌あり、ダンスあり、照明あり、効果音あり。そして驚いたのは、「RNC」というマイクフラッグ（マイクロホンにつける所属先を表示する飾り）をつけて、会場の各所、そして出先でリポートをする記者「のような」人々（全員が女性でCJ＝コンベンション・ジョッキーと呼ばれていた）が配置されていたことだ。「あれって僕らのコピーだよなあ」。テレビ局の記者リポートという手法が党大会の演出の一部にすんなりと取り込まれているのだ。それはこんな具合だ。「大会フロアからライブでお伝えします。ここはウエスト・バージニア州の代議員席です。ちょっといいですか。イラクでの軍事作戦に参加されたそうですが、そこでのあなたの経験を話していただけますか？」

- はい、偉大な最高司令官の下に仕えて光栄です。その名はジョージ・W・ブッシュです（大歓声）

リポーターは現役の記者以上に語りが達者だ。クリスチーン・アイバーソンというその女性リポーターは、熱烈な共和党員でルーテル派教会の伝道師だった。さらに大会二日目には、ペンシルベニア州で選挙演説中のブッシュ大統領と大会会場を生中継で結び、ステージ上の双子の愛娘ジェナ、バーバラとクロストークさせる。そしてファーストレディ、つまり自分の妻のローラを紹介、万雷の拍手に迎えられて彼女がさっそく登場。全くテレビの番組そのものの進行なのだ。そしてテレビ局の業界用語で言う完パケVTR、つまりパッケージ化されたVTR映像が会場の随所で流される。それはこんな具合の内容だ。「偉大なるレーガン元大統領」「パパ・ブッシュ一代記」「わが国に命を捧げる人々」「ブッシュ大統領の公約達成」

7月にボストンで開かれた民主党大会は、テレビショーという面で言えば、まだまだラスベガスあたりのフロア・ステージ・ショーという印象が強く、テレビ的ではない。キャロル・キングやウィリー・ネルソンといった大物シンガーが登場して歌を披露して会場を盛り上げたが、やはり、それは会場コンサートの域を出ていない。総じて民主党大会は、真面目なことに、会場に立錐の余地もないほど詰めかけた代議員を相手に大会を進行させていたのであり、共和党大会は、会場にいた代議員を巻き込んで、テレビの前にいる視聴者を相手に大会を進行させていたという印象だ。』

このリポートと、冒頭に掲げた大川豊が見た選挙戦の光景から得られる印象について、以下に列記してみる。共和党が総じて「サッカーや野球の応援のように」熱狂的であり、パフォーマンス過剰であり、短いスローガンを連呼する祭典的であったなら、民主党は祭典的ではなく、あくまでも演説中心の弁論会的な、堅苦しい真面目で地味な雰囲気であった。繰り返すまでもなくこの双方の光景は選挙戦であって、サッカー場でもなければ野球場でもないし、ましてやライブショーでもないということを押さえておく必要がある。政治が言葉であるなら、選挙戦が弁舌中心に据えられなくてはならないことはいうまでもない。もともと言葉が苦手なブッシュ陣営には言葉がなく、その代わりに口

ーガンやキャッチコピーが溢れ返り、言葉の欠如を熱狂的な一体感で埋めようとしていた。反対にケリー陣営は選挙戦をライブショー的な雰囲気に染め上げようとはせず、あくまでも言葉（弁舌）を中心とした選挙戦としてオーソドックスにたたかおうとしていたとみられる。

「戦時下の大統領は有利である」と再三メディアでいわれていたように、いまのアメリカは戦時下である。本土で戦闘が行われていなくても、毎度のことのようにイラクまで出かけて米兵の死傷の上に、イラクの民間人まで巻き添えにしながら、戦闘を仕掛けていることを忘れてはならない。その戦闘の最高司令官であるブッシュ陣営が、ライブショーのような熱狂的な選挙戦を繰り広げているのである。このような選挙風景はどこかおかしくはないか。どんどん増えていく戦争の死者をみないように遠くに退けて、盛り上がることばかりに熱中しているような選挙戦というものは、一言で言えば愚劣そのものではないのか。ブッシュやケリーがどうのこうのという以前に、こんな乱痴気騒ぎをみていると、ハードロックの音量をガンガン上げながら、動く標的は子供であろうと女であろうと、見境なく気違いのように銃を乱射しまくる米兵の姿とどうしても重なってくる。

この両陣営の選挙戦の光景はそのまま、双方の党大会になだれ込んでいる。「選挙はテレビショーのように進められ、それをテレビがテレビショーそのものとして報じる。有権者は視聴者・観客として自ら振る舞い、テレビという空間のなかですべてが決まる。米大統領選のこのあまりの露骨さにはただただ辟易するばかりだ」という金平茂紀の嘆息は、もちろん「大会の進行自体が、放送台本に従って進められる、まさに生番組」そのものとして繰りひろげられている共和党大会に向かっている。共和党大会そのものが「最大のテレビショー」として演出されているから、ブッシュ陣営にとって有権者は視聴者として把握されており、したがって彼らが飽きないように、歌やダンスを交えたさまざまな工夫を凝らしている。成人の4人に1人が自分の名前程度の読み書きしかできないアメリカ人は、ブッシュと同様に活字が苦手な人が多く、彼らの大半がテレビでしか政治を知らないことを知り抜いているので、陣営はプロパガンダとして「テレビの番組そのものの進行」を最大に利用しているのだ。

共和党大会が「会場にいた代議員を巻き込んで、テレビの前にいる視聴者を相手に大会を行なっていたという印象」であったのに対して、民主党大会は「テレビ的ではなく、「会場コンサートの域を出ていな」かった。共和党大会のようにテレビの前にいる視聴者に、バラエティーに富んだテレビショーを見せて投票に結びつけようという戦略を取らなかったので、「総じて民主党大会は、真面目なことに、会場に立錐の余地もないほど詰めかけた代議員を相手に大会を行なっていた」つまり、ブッシュ陣営はテレビを最大のプロパガンダとして利用したのに対して、ケリー陣営はそうしなかった。ケリー陣営とてテレビがアメリカ人の有権者に訴える最大の情報ツールであることを知らないわけではなかったろうが、敢えてそうしなかったと思われる。テレビショーを競って、どちらのテレビショーが面白かったかという水準に大統領選を貶めるべきではない

い、という自制心が働いたからだと推測される。

テレビショーや面白さで勝って、一体なんになる、という自問がケリー陣営には渦巻いていたとみられる。ブッシュ陣営にはなにがなんでも、どんな手を使ってでも勝たなくてはならない、勝ってナンボの世界ではないか、青臭いことをいっていたら、勝ち抜くことなどできない、という空気が支配的であったのが感じられる。ケリーはナイーブすぎるという声がメディアに流れることがあったが、本当はナイーブすぎるとか、手段を選ぶな、といった手法の底に根本的な問題が潜んでいるにちがいなかった。金平茂紀のリポートは候補者同士のテレビ討論に言及しながら、テレビというものの絶大な影響力に触れている。

《今回のテレビ討論への有権者の関心はかなり高く、ある調査結果では、61%の人が「大統領テレビ討論を是非とも見たい」と答えており、1996年にクリントン大統領が再選された際の選挙の時と同じくらいの関心の高さだという。

大統領テレビ討論では、すべてが視聴者の前に晒され吟味される。容姿（髪型、肌の張り具合、視線の強さ、スーツのセンス、セクタイのセンス、シャツの色、靴などなど）、身振り（笑い方、ジェスチャー、相手の主張を聞く際の真剣度などなど）、そして何よりも人を惹き付けるディベート術、論理の明快さ、わかりやすさ、説得力、魅力的なサウンドバイト（見出しどとなるような短いセンテンスの有無）、謙虚さ、正直さ、フェアな態度などなど。

大統領候補同士の討論は、今回の場合、計三回予定されている。全米ネットワークが分担して、視聴者が最も見やすいプライムタイムに放送される。（…）第一回目のテレビ討論は、フロリダ州マイアミで行われ、東部時間午後9時から午後10時30分までの一時間半にわたって行われる。この第一回目の討論はきわめて重要だ。第一印象がその後の流れを決定づけるからだ。放映にあたってのテレビカメラの撮影の仕方などを定めた32ページの覚書が手元にあるが、この実に細かな規定自体がテレビ討論の影響力がいかに絶大かを物語っている。》

もちろん、この大統領テレビ討論も紛れもなくテレビショーやである。しかし、同じテレビショーやあったとしても、バラエティーショー化された共和党大会などとは根本的に区別される必要がある。共和党大会が歌とダンスのバラエティーショーにほかならなかつたとすれば、大統領テレビ討論はブッシュの苦手なディベートが中心になっているからだ。だからといって、ディベートの優劣で圧倒すればいいというものではない。2000年の前選挙で政策通ぶりを見せつけたゴアが、ブッシュの発言に大きなため息を連発し、その表情がテレビに映しだされたために、視聴者の反発を買ったことがあったからだ。ディベートで優位に立つにしても、視聴者に好印象を与えることが不可欠とされ、その点でテレビショーやであることは間違ひなかった。大統領選がテレビショーや化することに懸念を感じているだろうケリー陣営といえども、この大統領テレビ討論ではケリーがいかにディベートに長けた、大統領にふさわしい有能な人物であるかを、視聴

者にむかって強く印象づけ、演じなければならなかつた。

金平氏は、『大統領テレビ討論に関して、いまだに語り草になっている』、60年のケネディとニクソンとの間で行われた史上初のテレビ・ディベートを取り上げる。

『一回目の討論でラジオを聞いていた人はてっきり「ニクソンが勝つ」と思ったのだが、テレビを見ていた人は「ケネディが勝つ」と思った。それほど映像の力が音声・活字の力を圧倒してしまつた瞬間である。

この時、スタジオでケネディが「メイク（化粧）はいらない」と断つたのをみて、ニクソンは後から自分だけ化粧していたと言われるのを恐れて、メイクを断り、スタジオの樂屋で濃い髪を隠すためにこっそり「どうらん」を塗ったため、ひどく不健康な顔立ちになってしまったという。一方のケネディは日焼けして健康なタフガイだった。容姿の差は明らかだった。実は、この時の第一回テレビ討論を企画・演出した人物こそが、CBSテレビの看板報道番組「60ミニッツ」の名物プロデューサー、ドン・ヒューイットだ。当時、若干38歳だった彼は、あの時のことを回想して現在では深い後悔の念を抱いているという。

「あの夜、テレビと政治はお互いにどんなに役に立つかに気づいてしまつたんです。彼らにとってテレビはもっとも効果的な宣伝媒体。一方、テレビにとっては底なしの金づるでした。テレビに出すには大統領選挙は戦えないと気づいたあの瞬間、アメリカの政治はダメになってしまった。私はパンドラの箱を開けてしまったんです。そして、政治はマネーボードになってしまったのです」

ドン・ヒューイットの悔いは、この言葉を語った当時よりもさらに深くなっているだろう。しかし、個人的に思うのは、このような政治とテレビの蜜月は、本質的には永遠には続かないということだ。テレジェニック（テレビ映りがいい）という要素が政治家の最も重要な資質になってしまったことが、否定される契機がいつの日か訪れるだろう。テレビ報道の世界について、そのことを強く思う。』

テレビ報道の世界に身を置く金平氏だからこそ、より一層「このような政治とテレビの蜜月は、本質的には永遠には続かない」ことを願っているのだろう。「テレジェニック（テレビ映りがいい）という要素が政治家の最も重要な資質になってしまつ」ているなんて、なんともバカバカしい。政治家がテレビ画面の中で政治を行うわけではないことを考えるなら、誰でも「テレビ映り」と政治とがなんの関係もないことに気づく筈ではないか。それほど一般大衆は愚かではないと金平氏は言いたいのかもしれないが、それほど楽観的なことではないと思われる。なぜなら、そうなるためには有権者が視聴者であることをやめなくてはならないからだ。テレビに依存することをやめなくてはならないし、テレビに操作されることに対して自らの拒絶の意思を示す必要があるだろう。そんなことが、活字文化よりも凄まじい勢いで映像文化に浸食されている現代の人々に、可能のことであろうか。第三回のテレビ討論でブッシュが論戦で負けていたのに、ギャラップ社の調査で5ポイント高かったのは、好感度が上回っていたからだ。

毎日北米総局の河野俊史記者はコラム(10/21)で、この好感度についてこう書く。《英語で「ライカビリティー」と呼ばれるこの尺度は、例えば「一緒に夕食をしたい『いい奴』かどうか」といった感覚で説明される。討論に太刀打ちできず、おどおどしたり、ぎこちない笑いを浮かべる候補の方が「人間味がある」と映ったとしたら、ケリー氏には気の毒な限りだ。》前回、ゴアに「口だけは達者」というレッテルを張って逃げ切ったブッシュの巧妙な手口を例に挙げ、《投票日まで10日余り。各種世論調査の結果は錯そうしている。最後は理屈ではなく、ライカビリティーの勝負といわれる。「ケリー氏と夕食を共にしたい」と人々が思うかどうかだ》と締め括るが、奴と一緒に夕食を共にする気はないが、大統領は奴にまかしとけばいい、と有権者が思うようにならなければ、「政治とテレビの蜜月」は終わりっこない。

ケネディとニクソンの史上初のテレビ・ディベートを企画・演出したプロデューサーが後年、政治がテレビショー化して、「アメリカの政治はダメになってしまった。私はパンドラの箱を開けてしまった」と後悔の念を抱いているが、彼がテレビ討論を企画・演出しなくとも、他の誰かがその役割を果たすことになるのは必定であった。政治が「もっとも効果的な宣伝媒体」としてのテレビに目を付けない筈がなかったし、テレビのほうも「底なしの金づる」としての政治に無関心でいられる筈がなかったからだ。福田和也が連載コラム(『週刊新潮』04.12.23)で、100周年を迎えた去年のゴンクール賞受賞作品であるジャック＝ピエール・アメットの『ブレヒトの愛人』を取り上げている。《受賞作は、亡命先のアメリカから東ドイツに帰国したブレヒトと、秘密警察から送りこまれた若き女優マリア・アイヒとの関係を主軸に、戦禍の爪痕が残るベルリンや、ソビエトのもとでの独裁体制、秘密警察の暗躍などが描かれている》る。

ナチスの圧政を嫌ってアメリカに渡ったブレヒトは、戦後のアメリカに吹き荒れた「赤狩りの嵐」に巻き込まれて、帰国を決意する。帰国したブレヒトを待ち受けていた東ドイツの現実はどのようなものであったのか。《故郷ドイツにたいするブレヒトの見方はなかなかに厳しいものでした。ドイツの市民＝ブルジョアジーは、完全にナチ化されていて、非ブルジョア化する以外に更生不可能だと。「つまり、ブルジョアは、考えていいようといまいと、礼儀正しかろうと正しくなかろうと、理想主義者であろうと、闇屋であろうと、常にナチ主義者なのだ」(『ブレヒト作業日誌4』岩淵達治他訳)。しかしまた、ソビエトのくびきの下にある東ドイツの現状にも批判的でした。ルカーチが『ゲーテとシラーの往復書簡』で、シラーらがいかにしてフランス革命を自分たちのものとしたか跡づけているのにことよせて、「自分の国の革命を持たずして、またぞろ今度はロシアの革命を　自分のもの　にしなければならなくなるのかと考えると寒気がする」(同上)と書いています。》

映画『グッバイ、レーニン！』が同時に「グッバイ、アメリカ！」でもあったことを想起させるブレヒトの記述であるが、西側がナチズムの社会であり、東側がスターリニズムの社会であるなら、我々の居場所は一体、どこに求めればよいのか、という「行き

場のなさ」の呻吟がブレヒトから深く聞こえてくる。《ブレヒトは、なかなかの艶福家で、二度の結婚以外にも、何人もの女性がいたことはよく知られて》あり、最晩年の1954年に記した自身のメモの中の、「僕のいまの、そしてたぶん最後の恋人は、最初の恋人にとても似ている」(同上)という「最後の恋人」によって、アメットの小説ではヒトラーがブレヒトのライバルであったという観点が示される。

《何よりも刺激的なのは、ブレヒトにとって最大のライバルは、ヒトラーだったという「恋人」の認識でしょう。「ブレヒトは、ナチスの演劇性、ナチスの劇場性がどれほど効果的であったかを知っている。松明行進、大仰な言葉、盛大な行列、歌、幟、通夜。ナチスの集会のなんと効果的な舞台であったことか！ 激越な言辞、巨大な演台、顔を輝かせた男たちの人文字、その彼らこそ貧しい失業者、浮浪者であったというのに……。ブレヒトは、こうした舞台装置がドイツ人民をいかに熱狂させたかを知っていた。そう、ヒトラーは彼よりも優れた舞台美術家であったのだ。それはブレヒトにとって根源的な問題であった》(同上)。ヒトラーに勝利しえないブレヒトという認識は、そのまま今日の分裂する世界を前にした、表現者の課題を示しています。》

「ヒトラーに勝利しえないブレヒトという認識」とは説明するまでもなく、現実の世界を舞台に熱狂的に装飾を施し、縦横無尽に現実の舞台を作り変えていくヒトラーの手腕の前では、小さく区切られた小屋で精一杯演じられ、繰りひろげられる華麗な舞台も、足元にも及ばない貧相で、その場限りの感動にすぎないものなのか、ということだ。ばらばらに振る舞っている巨大な大衆を一糸乱れぬ、見事に統制された塊として操る指揮者としてのヒトラーには、どんな小集団のオーケストラの指揮者もかなわなかつたといつても同じことである。どうしてブレヒトはいつまでも虚構の領域に立った舞台美術家としてしか観客に訴えることができず、ヒトラーのようにすべての人民を自分がつくり上げる舞台の観客かつ役者にしてしまうような、壮大な舞台を世界にむかって突出せしめることができなかつたのか、という理不尽とも思える問い合わせが横暴なかたちをとって投げかけられてくるのだ。

この問い合わせを米大統領選に向けると、どのテレビショーもどうして大統領選という「最大のテレビショー」に及ばないのか、という問い合わせにつながってくる。「松明行進、大仰な言葉、盛大な行列、歌、幟、通夜」、そして「激越な言辞、巨大な演台、顔を輝かせた男たちの人文字」という「ナチスの演劇性、ナチスの劇場性」こそは、テレビのない時代におけるテレビショード的な演出効果に溢れ返っていたといえよう。ヒトラーがつくり上げたこのような舞台装置がテレビ時代になって、共和党大会にみられたような、歌にダンス、カラフルな照明に、人を別世界に誘導する効果音、「RNC」というマイクフラッグをつけたリポーターの各所への配置、パッケージ化されたVTR映像の洪水、といった「ショー」の光景として進化していると捉えられる。というより、テレビ時代になって「ナチスの演劇性、ナチスの劇場性」がより完璧さを増して甦っているというべきだろう。

第二次大戦でヒトラーのナチスを滅ぼしたアメリカは反ナチズムに向かっていったのではなく、むしろより民主主義的なナチズムに向かっていったことを、「つまり、ブルジョアは、考えていようといまいと、礼儀正しかろうと正しくなかろうと、理想主義者であろうと、闇屋であろうと、常にナチ主義者なのだ」というブレヒトの言葉は予見していたように思われる。ドイツの非民主的なナチズムはアメリカの民主的なナチズムの前で敗退したのかもしれないという見方を、少なくともブレヒトは提出していたのである。ナチスの集会において人文字を作った「顔を輝かせた男たち」こそ「貧しい失業者、浮浪者であった」という構図は、今回の大統領選においてもブッシュの減税政策が富裕層に対する減税推進であって、貧困者層には増税となって跳ね返ってくるだけでなく、失業中の若者がイラク送りとして狙い撃ちされている現状であるにもかかわらず、ブッシュの神輿を担いだ有権者の中に少なからぬ貧者や失業者たちが含まれていたという構図としても継承されていたのだ。

金平茂紀のリポートの中で、政治が「最大のテレビショウ」化する中心として位置づけられているのが、臨時的な特番である党大会や大統領テレビ討論ではなく、日常的に放映されるテレビCMであることを浮き彫りにしてみせる。民主、共和の両党とも、合法的に設立された通称「527団体」という非課税団体を通じて、ソフトマナーを広範に集めて、《その団体が民主党、共和党の候補を支持する、あるいは中傷するテレビCMをガンガン流している》。共和党支持の「527団体」の一つ「真実を求める高速艇退役軍人」が、《ケリー候補のベトナム戦争当時の言動を非難するテレビCMを流して、ケリーに大きな打撃を与えると共に、親のコネを使って兵役逃れをやっていたかもしれないブッシュの弱みを遠くに追いやってしまった事例を取り上げている。

《ケリーは民主党の指名候補を勝ちとるにあたって、自らを「ベトナム戦争の英雄」と位置づけた》ことによって、《そのベトナム戦争で同じ戦場にいた退役軍人たちが、テレビCMのなかでは「彼は裏切り者だ。彼に忠誠を尽くすことはできない」「ケリーは勲章をもらうためにウソをついた」などと次々に告発するのである。CMの映像の背景には、1971年に若きケリー青年が上院外交委員会の公聴会で証言した際の映像・音声が使われている。曰く「米兵は、ベトナム人をおもしろ半分に殺し、耳を削ぎ、首をはね、レイプした。」CMの狙いは、ベトナムから復員したケリーがその後、反戦運動に転じた点にあった。《その部分は民主党大会会場で上映された自伝ビデオからは微妙にカットされている。「反戦」の二文字は禁句なのだ。》軍の最高司令官である大統領にこんな「反戦」人物を就かせるわけにはいかない、ということなのだ。

《現在4種類まで放送されているこの「高速艇退役軍人」たちのテレビCMによるネガティブ・キャンペーンの効果については、いろいろな見方があるが、テレビCMとしての破壊力は相当なものだったと言わざるを得ない。

事実、ある調査によれば、このCMについてのアメリカ国民の関心度は、ハリケーン襲来や北オセチアの学校占拠事件、イラク情勢に次いで、アテネ五輪と並んで7位に入

っている。CBSテレビの8月の世論調査では、このCMが流れてからの時期、ケリー候補の支持率は大きく下がったという数字がある。「戦時大統領」を公言するブッシュ大統領とのイメージのコントラストは相当なものになった。実弾としてのテレビCM。中傷CMにはそのような破壊力が時としてあるのは事実だ。そして、この実弾を支配するのは結局のところ、資金力だ。もうひとつは、ベトナム戦争というアメリカ国民の深層心理にあるトラウマを刺激したことが、このCMの効果を倍加させた。ブルッキングス研究所のステファン・ヘス上級研究員は言う。

「ケリーはベトナム戦争での戦歴をアピールしました。でも彼はたぶんナイープすぎたんじゃないでしょうか。誰も彼の経験に異議を唱えないだろうと思っていたのだとしたら。実際には、ベトナムから帰還して彼は反戦運動を率いていましたから。そしてこのことはアメリカ人の大部分から非常に恨みを買っています。ですから、ケリーについては、戦争の英雄として熱狂する人々がいるのと同じくらい、反戦運動のヒーローとしての彼に困惑する人々もいるのです。だから彼は選挙戦に自分にまつわるすべてのことがらを持ち込んだことになります」

戦後アメリカが関わった戦争の中で唯一敗北を喫したベトナム戦争に対する歴史としての清算はまだまだなされていないことを、このテレビCMは明らかにしている。』

この中傷CMについては、同じ『論座』誌上で戦略国際問題研究所日本部上級研究員の渡部恒雄が、《オハイオやペンシルベニアなど激戦州に集中的に流した》、この《広告の中のケリー氏の軍歴に関する中傷内容は公的な文書などの証拠がない不確かなもので、かなり問題があ》り、《さすがにブッシュ陣営も、このような根拠が薄い中傷広告には無関係という立場をとっている。しかし、無関係と見る人は誰もいない》と指摘している。同じ『論座』誌上で在米ジャーナリストの池原麻里子はこの件について、《ケリー側が行ったテレビ広告の主張は事実に反していることが新聞などで報道されたが、一度プロパガンダが浸透してしまうと自らの生命の危険を冒して戦友を救った英雄がその後の反戦活動のため裏切り者になり、親のコネを利用して前線を逃れたブッシュ氏が英雄として扱われるというねじれ現象が生じている》と書き、そこにブッシュ陣営の選挙参謀カール・ローブの《策略「政治はパーセプション（物の見方）が現実」の代表的な例》を見出している。

ローブは、《「悪いメッセージ」も「弱いメッセージ」よりは強い》（渡部氏の文中）ことを熟知した上で、素早く行動に移すことのできる人物であり、ケリーのベトナム戦歴に関する中傷CMが事実に反していることが新聞などで報道されても、その中傷CMをテレビで見る視聴者が新聞を読まないことをちゃんと計算しているような人物なのだ。

敏腕でエゲツないローブに対して、ケリー陣営の政治アドバイザーのボブ・シュラムは池原氏によれば、《ジョージ・マクガバン氏からアル・ゴア氏まで7回も大統領候補の参謀を務めたが、全員が落選した不吉な実績の持ち主》である。つまり、当選が確実と予想されていたアル・ゴアまで見事に落選させてしまった選挙参謀なのだ。ブッシュ

陣営がケリーに対するあくどい中傷を繰りひろげているときでも、同じ水準でケリー陣営がブッシュに対して恥も外聞もない中傷をお返しすることを控えていたとすれば、それは両陣営の選挙参謀の差にあったことはいうまでもない。ブッシュをテキサス州知事へ、更に大統領の座にまで押し上げ、「ブッシュの頭脳」とも呼ばれるカール・ロープを「中傷の達人」(『世界』04.11)として厳しい批判を加えるのは、テキサス州のジャーナリスト、ジェームズ・ムーアである。《「真実を求める高速艇退役軍人の会」は、代理人を使って依頼主の汚い仕事をやらせるというロープの戦術のひとつに他ならず、最近の新聞見出しがたどっていけば、明らかにテキサスに結びついている。この団体が魔法のように現れたとき、ロープにはすでに第三者を使った中傷の達人としての定評ができていた。テキサスの共和党を立て直す際に、ロープは敵を中傷するためのひな形を開発したのだ。目標は、自派の候補者は争いから超然とさせておき、一方対立候補には問題を争点とするようにあおり立て、それによって相手を、終始守りに回って根も葉もない非難を否定せざるを得ない状況に陥れることだ。最終的にロープの依頼人は、筋書きでは、さっさと身を引いて、見苦しいことは終わりにしようという。無論ロープの書いた台本では、休戦の呼びかけが行なわれる頃にはすでに、対立候補にダメージが加わっている。》

この汚い手口はブッシュを勝たせるために進歩的で開放的なテキサス州知事であったアン・リチャーズにむかって仕掛けられた。彼女は《ゲイとレズビアンを数名、州の委員に任命していた》が、《独身女性のリチャーズ知事はレズビアンじゃないかという噂が、コーヒーショップや農協を通じてすぐに広まり始めた。》テキサス東部選出の共和党の州上院議員のビル・ラトリフが、《リチャーズが州の公職に「自ら同性愛の活動家と認めた者を任命している」として非難し、それが新聞に引用された。するとこの噂に一種の正統性が与えられ、広く報道されるようになった。それから、ちょうどケリーと「真実を求める高速艇退役軍人の会」の論争でやったように、ロープはブッシュを、理性と分別の声として前面に出した。「上院議員は私を代弁しているのではない」と、ブッシュは記者に語った。「私には彼が何を言っているのかわからない。私は争点本位の選挙戦をやろうとしているのだ」》そして、ブッシュは94年、テキサス州知事の座に就いた。

00年の共和党の大統領候補予備選においても、この手口が活躍した。相手はジョン・マケイン上院議員だ。《投票の前にマケインは、ロープが操る代理団体から、さまざまな非難を受けていた。混血の婚外子を産ませている、結婚相手は薬物中毒患者だ、思いやりのある夫ではない、妻の一族の財産を使って上院議員の議席を買った、そして最悪なことに、ベトナム帰還兵に背を向けている。このような非難が投げつけられる一方、集会でジョージ・W・ブッシュは、マケインに向かって、争点を紳士的に議論しましょうと言っていた。》コロンビアでの予備選挙討論会を前にしたステージ上で、激怒したマケインが「ジョージ、恥を知りたまえ」と言うと、「上院議員、それが政治ってもの

ですよ」と答えるブッシュに、「何でもかんでも政治じゃないぞ、ジョージ」とマケインは返した。この中傷戦略が成功して、ブッシュは共和党の大統領候補になった。

02年の中間選挙でジョージア州のマックス・クレランド上院議員に対するやり口は、もっと酷かった。クレランドが上院議員の一人として提案、起草した国土安全保障省設立のための法案が最初、ローブの指導下にあるブッシュ大統領によって否定されたものの、世論調査でこの構想への国民の多大な支持が判明したために、《ローブはあわてて共和党議員に自前の法案をまとめさせた。だが、クレランドはブッシュ法案に反対票を投じた。そこには連邦職員が賃上げを交渉する力を大幅に削ぐような措置が含まれていたからである。また、新しい機関の効果をかなり小さくすることになると思われる主要な条文を、クレランドは削除してしまった。

再選を目指し選挙遊説に出たクレランドが気づいたのは、ベトナムで両脚と片腕を失った彼を、ローブに入れ知恵された対立候補のサクスピー・チャンブリスが非愛国者呼ばわりしていることだった。チャンブリス当人は軍務に就いたこともないのにだ。あるテレビコマーシャルでは、クレランドの顔を変形させてオサマ・ビン・ラディンやサダメ・フセインの顔にしていた。

「いったい私たちはどうなるんだ？」クレランドは昨年のインタビューの際、私に向かって言った。「こんなことをして国のために何かいいことがあるのか？ 私はもっとひどい経験をしているからいい。手足をなくしているからな。しかし、社会に奉仕したいと考えている人たちはどうなる？ これが自分たちの将来だとしたら彼らはどう思うだろう？ これはわが国にとって何を意味するのだろうか？」

正義や民主主義を振りかざしてアフガン空爆を行い、イラクを侵攻するブッシュ政権の足許で、こんな不正や悪徳が堂々と行われているのだ。「ジョージ、恥を知りたまえ」と激怒したジョン・マケインは、自分に対して行ったのと同じ非道なやり口で友人のケリーを追い落とそうとする《「真実を求める高速艇退役軍人の会」の広告を、「下品でいんちき」と呼》び、「ブッシュ大統領はあのCMをやめて謝るべきだ」と言ったが、共和党の上院議員としてブッシュを支援することはやめていないし、ローブの手口を暴いたりまではしていない。ジェームズ・ムーアは、《これがテキサス流のやり方なのだ – そして、それがアメリカ全土で通用するかどうかは、カール・ローブ次第である》と結ぶが、もちろん、通用したのだ。なにしろ前回の大統領選でも通用させてきているのだから。大統領の出口調査で投票者の最大の関心が、20%の「経済」や15%の「イラク」を上回って、「道徳」が22%を占め、「道徳」と答えた人々の79%がブッシュに投票したらしいが、そのブッシュ自身が最大、最悪の「不道徳」な選挙戦によって勝ち抜いたのだから、さすがはブラックジョークの本場と、ここは見下げるしかないのだろうか。

2004年12月23日記